

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）個人研究2025 年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職名	氏 名		
	外国語教育研究センター・准教授	河野 美奈子		
研究課題	ケベック州の先住民文学におけるフランス語の位置づけ			
研究期間	2025 年 度			
研究経費 (1 円 単 位)	(支出金額) 1,000,000 円 / (採択金額) 1,000,000 円			
研究の概要 (200～300 字で記入、図・グラフは使用しないこと。)				
当該研究の研究目的を含むこと。 【以下、報告書全体について】他の研究分野の委員が評価することも想定し、わかりやすく記載すること。				
本研究は、カナダ、ケベック州における先住民文学を研究の対象としている。とりわけ先住民文学のなかで使われているフランス語について着目した。 ケベック州では 1977 年に制定された 101 号法（フランス語憲章）によって、フランス語が社会の共通言語として制度的に位置づけられた。この言語政策は、英語の影響力が強い北米社会においてフランス語の地位を保護、強化することを目的としている。しかしその一方で、ケベックに居住する先住民諸民族の言語との関係という新たな問題も浮かび上がらせている。先住民作家のなかには、自らの民族言語で作品を執筆する者もいれば、フランス語を表現言語として選択する者もいる。または民族の言語とフランス語の 2 言語併記で執筆する者もいる。こうした言語選択は、カナダ社会のなかで先住民族としてのアイデンティティと、フランス語圏社会の一員としての位置づけとのあいだに生じる文化と言語の両面にまたがる複合的状況を反映している。 研究者はこれまで、詩人ジョゼフィーヌ・バコン（1947-）および作家ナオミ・フォンテーヌ（1987-）を中心に研究を進めてきたが、本研究では新たにナターシャ・カナペ＝フォンテーヌ（1991-）の作品も対象に加えた。これにより、フランス語圏に生きる先住民作家、とりわけ若い世代の作家たちがフランス語とのあいだで経験する揺らぎや葛藤に着目し、その言語的・文化的緊張関係を明らかにすることを試みた。				

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)
[ケベック文学] [先住民文学] [フランス語]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。
- ・どのような点において、当該研究分野の学術研究推進の高度化に寄与できたのか。

本研究の目的は、カナダ・ケベック州の先住民文学を対象に、「土地」「記憶」「祖先」「寄宿学校のトラウマ」「治癒」といった共通の主題に着目して作品を分析し、そこに見られる文学的ダイナミズムを明らかにすることである。また、その背後には、作品における言語の問題が深く関わっていると考えられる。

2025 年度立教 SFR 申請書に記したとおり、本研究ではケベック州のイヌー作家に着目する。イヌーは、ケベック州において人口規模が 3 番目に大きいファースト・ネーションズであり、かつてはセントローレンス川流域およびその内陸部を移動しながら生活していた民族である。現在でも、セントローレンス川沿いに複数のコミュニティが点在している。こうした歴史的背景は、イヌー作家の文学において「土地」や「記憶」といった主題が重要な意味をもつことと深く関わっている。

さらに本研究では、作品における言語使用に加え、作品のなかで表象される言語のあり方にも着目する。ケベック州は、カナダのなかで唯一フランス語を公用語として採用している州であり、フランス語の使用についても法律によって厳格に規定されている。1977 年に制定された 101 号法(フランス語憲章)は、ケベック州において企業や学校などの社会生活の諸領域におけるフランス語の使用を制度的に保障するために制定された法律である。これにより、英語話者が多数を占めるカナダにおいても、ケベック州では現在、人口の 8 割以上が日常生活でフランス語を使用している。しかし、この 101 号法は主として英語の影響を念頭に置いた言語政策であり、先住民の言語は長らく周縁的なものとして位置づけられてきた。先住民作家たちは、歴史的・政治的要因のなかで翻弄されながら、自らの表現言語の選択を常に迫られてきたのである。そのため、彼らの文学においては、言語そのものが重要な主題としてしばしば作品の中心に据えられている。

研究代表者はこれまで、詩人ジョゼフィーヌ・バコンと小説家ナオミ・フォンテーヌを中心に研究を行ってきた。両者は現代のイヌー文学を代表する作家であり、詩と小説、また世代の違いはあるものの、その作品には「土地」「記憶」「祖先」「寄宿学校のトラウマ」「治癒」といった共通の主題が見られる。とりわけ、寄宿学校のサバイバーであるバコンは、断絶された祖先の記憶を回復するために詩を創作し、イヌー語とフランス語の 2 言語を併記するという表現を用いている。バコンにとって、イヌー語で書くことは自身のイヌーとしてのアイデンティティを取り戻すうえで重要な要因である。一方で、本研究では、寄宿学校において半ば強制的に習得させられたフランス語で書くことの意味についても分析を行った。彼女にとってフランス語は確かに支配者の言語であるが、同時に、「書くこと」を、フランス語を通して習得する契機となり、作家としてのアイデンティティの形成を支える重要な要因となっていると考えられる。バコンの作品分析を通して、作品におけるフランス語が、支配的言語であると同時に表現の言語として機能するという、アンビヴァレントな性格を有していることを明らかにした。

これに対し、ナオミ・フォンテーヌはフランス語で小説を執筆している。彼女は若い世代の作家であり、フランス語を母語として習得した世代に属している点が重要である。他方で、作品の随所に見られるイヌー語へのまなざしは、バコンのそれとは異なるあり方を示しているといえる。彼女にとってイヌー語は、かつて話していたものの、すでに忘却されつつある言語であった。作品のなかにイヌー語を書き込むことへの躊躇が認められ、それは、バコンの世代と同じようにイヌーとしてのアイデンティティを表明してよいのかという葛藤の表れであると考えられる。

本研究では、両作家の作品における言語使用、とりわけフランス語のあり方に着目し、それを通して両者のイヌーとしてのスタンスの差異を明らかにした。

次に、ナオミ・フォンテーヌと同世代の作家、ナターシャ・カナペ＝フォンテーヌの作品を取り上げた。彼女は詩人、小説家、パフォーマー、そして活動家として幅広いジャンルで活躍しているイヌーの作家である。1991 年にケベック州のベ・コモで生まれた彼女は、幼少期をペサミットの共同体において祖父母のもとで過ごし、イヌー語を用いて育った。2012 年に詩集『私の魂に土足で入り込むな』を発表し、アメリカ大陸フランス語圏作家賞を受賞するなど、若手作家として注目を集めた。彼女の作品は、先住民の女性、祖先の記憶、イヌー語、先住民の領土といった多様な主題を扱っているが、その創作の背景には、先住民を取り巻く諸問題がいまだ解決されていないという現状があると考えられる。また、活動家としても精力的に活動しており、人種差別やさまざまな不条理に異議を唱える姿勢は、彼女の作品において普遍的な問題へと展開している。

祖先の記憶を詩で書くことにより、祖先の歩いた道を辿ろうと試みるバコンや、断章形式で小説を書くフォンテー

研究成果の概要 (つづき)

ヌとも異なり、ナターシャ・カナペ＝フォンテーヌは、現代の先住民社会が抱える諸問題と、若い世代における自己のアイデンティティの捉え方を前景化して提示している作家であるといえる。

彼女の初の小説『ナウェタクアン——喧噪のための沈黙』(2021) は都市で生きるイヌーの女性が、土地・言語・祖先との断絶を経て自己を再生していく過程を描いた作品である。本作は、都市と祖先の土地という 2 つの空間を往還しながら、個人の癒しとともに先住民共同体の記憶の再生を試みる文学的営為として読むことができる。

主人公モニカはケベック大学モントリオール校 (UQAM) で美術史を学ぶ学生であり、先住民としてのアイデンティティをあまり強く意識していない若者だった。しかし、先住民の権利獲得を目指す活動に積極的に関わる友人たちと出会うことで、やがて自身の内にある「イヌーとしての自己」を強く意識するようになる。それは、断絶していた母親との関係を再考する行為であると同時に、遠ざかっていたイヌーの文化や言語を取り戻そうとする試みでもあった。

モニカは、現代に生きる先住民の若者の一例を示しているといえる。彼女はケベック州で生まれ、フランス語を母語として育った世代に属している。そのため、先住民としての帰属意識は上の世代に比べて希薄になっていると考えられる。他方で、自らをカナダ人であると明確に位置づけることにも躊躇が見られる。作品においては、モニカが自らのアイデンティティの問題と向き合うために、カナダ国内外の先住民とのつながりが重要な役割を果たしている。彼女はケベックを離れ、バンクーバーからメキシコに至るまで複数の土地を横断し、それぞれの地の先住民と交流する。この過程を通して、モニカのイヌーとしての意識は強まり、イヌーの文化および言語をあらためて見つめ直す契機となっている。

この点において、イヌーの精神世界を詩的に探求するバコン、および現代の先住民の物語を一定の距離を保ちながら描くフォンテーヌの小説とは異なり、カナペ＝フォンテーヌにおけるイヌーへのまなざしの特徴が明らかとなる。

また本作は、物語の展開の合間に散文的断章が挿入される構成をとっているが、カナペ＝フォンテーヌはそのなかでフランス語とイヌー語を交錯させ、それぞれの言語がもつ固有のニュアンスを使い分けている。本研究では、イヌー語が集団的記憶を担う言語として、またフランス語が個人的記憶を表象する言語として機能している点を明らかにした。したがって、言語そのものが記憶の媒体として機能していると考えられる。このような言語の機能は、寄宿学校の重い記憶がモニカに受け継がれる場面においても確認される。すなわち、彼女はその記憶に打ちひしがれるのではなく、むしろイヌー語を学び直そうとする契機を見出しており、そこに言語がもつ治癒的機能が作用しているといえる。

カナペ＝フォンテーヌの作品におけるフランス語とイヌー語の関係を分析し、記憶との結びつきを明らかにした点は、本研究の中核的な目的は概ね達成されたと考えている。

以上の研究成果を、11 月 15 日に開催された韓国ケベック学会年次大会において発表した。また、その前日にはケベックの先住民文学に関する有識者とケベック州政府在ソウル事務所に集い、意見交換を行った。これらの成果をとりまとめ、国際学会において発表することができた点は、本研究の目的が一定程度達成されたことを示すものである。

また、書籍『カナダ文化事典』において「先住民文学」の項目を担当したことも、本研究の成果の 1 つである。本書はカナダの社会、政治、文化を包括的にまとめたものであり、研究代表者は「フランス語系カナダ文学」における「先住民文学」を担当した。そのなかで、ケベック州における先住民文学が歴史的・政治的背景のもとでどのように受容されてきたのかについて、具体的な作品を取り上げながら解説した。フランス語圏の先住民文学を代表する形で執筆を担ったことは、先住民文学研究において本研究がその深化、高度化に寄与したことを示すものといえる。

また、本研究の成果は教育の分野にも還元することができたと考えられる。複言語・複文化主義を基盤として、ケベックの先住民文学を用いたゼミナール授業の展開を構築した。さらに、その構想と展開をまとめ、3 月 12 日に名古屋外国語大学で開催されたシンポジウムにおいて発表を行った。加えて、本学全学共通カリキュラム「観光と文学」および法政大学「北米文化論 (ケベック講座)」において、先住民文学に関する授業を実施した。

以上のように、本研究の成果は国内外において発表することができたが、なお研究の余地を残している。当初の構想では、研究対象作家としてミシェル・ジャン (1960-) を挙げていたが、カナペ＝フォンテーヌの『ナウェタクアン』の分析に多くの時間を要したため、ミシェル・ジャンの作品との比較分析については十分に検討することができなかった。この点については、2026 年度以降の継続的な研究課題としたい。

また、当初の計画では北海道大学とのシンポジウムの開催を予定していたが、登壇予定者がケベックから来日できなかったため、本計画は中止となった。今後、あらためて計画を見直し、実施に向けて検討を進めていく予定である。

※この (様式 2) に記入の、成果の公開を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書 (A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式) を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①

該当なし

②

河野美奈子「先住民文学 (7. 文学)」カナダ文化事典編集委員会編『カナダ文化事典』、丸善出版、2026 年 1 月、担当 270～271 ページ、総ページ数 574 ページ。

③

河野美奈子「初修外国語における複言語・複文化主義：フランス語教育の実践とゼミナール授業への展望」、シンポジウム「AI 時代の今、なぜ大学で外国語を学ぶのか：複言語複文化主義とことばと教育」、2026 年 3 月 12 日、名古屋外国語大学。

④

(ラウンドテーブル登壇)

河野美奈子「ケベックの先住民文学について」、2025 年 11 月 14 日、ケベック州政府在ソウル事務所。

(学会発表)

Minako KONO «Évoquer l’indicible : territoires, mémoires et langues comme lieux de réappropriation dans *Nauetakuan, un silence pour un bruit*» (言葉にしがたいものを呼び覚ます：『ナウエタクアン——喧噪のための沈黙』における領土・記憶・言語の再受容の場としての役割)、韓国ケベック学会年次大会 À la rencontre des littératures autochtones du Canada et du Québec (カナダおよびケベックにおける先住民文学との出会い)、2025 年 11 月 15 日、韓国外国語大学校。

(講義)

河野美奈子「ケベックの先住民と文学」、全学共通カリキュラム「観光と文学」、2025 年 10 月 10 日、立教大学。

河野美奈子「カナダ、ケベック州の先住民文学」、法政大学「北米文化論 (ケベック講座)」、2025 年 11 月 20 日、法政大学。